漱石の思い出

松本文三郎

漱石の思い出

私が漱石を知るようになったのは、明治二十三年始めて文科部（当時の文科大学）に入学してからである。勿論漱石は文学科に、而して私は哲学科に籍を置いたのであるから、学科の上では何の関係もなかった。明治二十三年という年は我が邦に高等学校が増設せられ、始めて文学部の卒業生を送り出したので、大学に於ける文学部の入学生も大学創立以来未曾有の多人数といわれて居たのであるがそれでも哲史文三学部を通じ僅かに十五六人

に過ぎなかった。のみならず当時は少数の専攻学科の学生に対する特殊の講義を除いては、哲史文三部共通の学科が多かったので、在学三年を通じ私等も漱石と殆んど顔を会わさぬ日はなかった。私は同級中の最年少者であり、漱石は最年長ではなかったかも知れぬが、少くとも第二位か三位は下らなかったろうと思う。で私等の眼からは漱石は入学当時から老成人の如く感ぜられたものである。しかし其の態度はハキハキして時には寸鉄腸を刺すが如き警句を吐くかと思えば、時には又軽い洒落をいって人を笑わしたり、誠に親しみ易く、然も敬愛すべき

印象を与えたものである。

○

漱石の文学部入学当時英文科の教師はディクソン氏であったが、三年の卒業少し前になってディクソン氏の任期満ち、氏は確かカナダの大学へ去った。其後任として聘せられたのがウッドという人であった。私等哲学科では三年には英語はなかったので、ディクソン氏の教授は受けたが、ウッド氏に就いては何も知らない。が漱石のいうところによればウッド氏は呑んだくれで頗る不真面目な人物であったらしい。日本の大学など甘く見て居た

のかも知れぬが、英文専攻者の為の講義の時間にも、自身の講義ノートを作らず、クワッケンブスのレトリックから必要の部分だけ数枚を切抜き、これを白紙の間に挿み、宛も自身のノートを読むが如き風をして講述したという。クワッケンブスのレトリックは当時の学生に可なり広く読まれたもので、英文専攻のものでなくても誰でも知って居たものである。然も相手は漱石のような俊才であったから、直ちにその真相は看破されて了った。漱石は教室を出て私等の処へ来りプンプン怒って、彼の如きは宜しく鼓を打って之を攻むべきである。が自分は間

もなく卒業し大学を出てしまうのであるから、排斥運動だけは止めて置こうといって居た。が此先生は一期漸く終って直ちに辞任されたように思う。

○

当時文学部の学生の間には禅がかなり行われて居た。冬期の休暇などには随分鎌倉の円覚寺に出掛けたものである。漱石の「猫」の中に出て来る「天然居士」の米山保三郎君も其一人であり、私等も其真似事をやって居たものである。漱石も鎌倉へ行ったということであるが、私等の行って居た時分には漱石はまだ居なかったようで

ある、或はそれより少しく後であったのかも知れぬ。私等の行って居た時代円覚寺には渋川老師が居られたが、間もなく老師は遷化せられ、其後彼の釋宗演氏が円覚寺を董された。宗演師時代になってから私等は行かなかったから、其後のことは知らない、漱石の往ったのは或は其時代かも知れぬ。が漱石は東京を去ってから後も尚お引続き禅学には多少心を傾けて居たものらしい。というのは年月は今確かに覚えぬが、或時漱石からの依頼により私が東京で白隠禅師の門下東嶺和尚の「無蓋燈論」なるものを求めて之を漱石に贈ったことを記憶する。

○

漱石の在学時代は早稲田の自宅から毎日本郷まで往復して居た。当時は殆んど何等交通の便もなく徒歩する外致方なかった、恐らく片途一時間を要した事と思う。而して大学に於ける佛蘭西語の講義は各科学生の便宜の為め常に午前七時から始められ、冬期は教室内尚薄暗かった位であったが、漱石は殆んど之にも欠席した事はなかった。私は大学から僅か数町の処に下宿して居たが、それでも冬期には随分苦んだので、漱石の勤勉には驚嘆させられたものである。

正岡子規が漱石の親友であったことは世人の既に熟知するところである。在学二三年の頃は子規は本郷追分町の奥井と称する頗る広い庭園を有した下宿の離屋に居た。漱石は授業後しばしば子規の室に遊びに来た。私も同じ下宿の別室に居たので能くその室で会合したことがある。しかし私は文学に就いては殆んど門外漢であったから、普通の世間話の外は単に傍聴者に過ぎなかった。子規は盛に俳句を評論し、小説を批判して居た。而してその談笑の間にも頻りに俳句を作り之を紙片に書し漱石に示して居た。漱石も当時既に俳句を作って居たのであ

ろうが、斯かる席上では評論を主とし、自作を示すようなことはなかった。

○

前にも一寸名前を出した天然居士の米山保三郎君に就いては、漱石の「猫」の中には「空間を研究し、論語を読み、焼芋を食い、鼻汁を垂らす人である」といい、又「空間に生れ、空間を究め、空間に死す。空たり間たり天然居士噫」ともある。これは大体米山君の実を写したものである。天然居士というも米山君が円覚寺に参禅した時、渋川老師より授けられた居士号であり、「空間」

は米山君の大学院に於ける研究題目であった。米山君は私と同郷の出身で、哲学科に入学し、心理学を専攻したものであるが、数学は其最も好むところであった。君は頗る畸人であり奇行に富んだ人であった。君は大学在学中少しでも暇さえあれば図書館に入って居たが、図書館で如何なる書を読むにも必らずウエブスターの大字書を借り、曾て之を座右から離したことがなかった、而して其読むところの、外国書たると漢籍たるとを問わないのである。又夏期休暇などには其家に在って真裸となり、兀々と数学の研究をして居た。在学当時外山先生の社会

学の筆記試験に際し、先生は時間の初教室に来り問題を出した儘直ちに退席せられ、学生は教室に於て答案を認め、了れば各自之を教官室に持参し先生に手渡したのである（これは外山先生に限らず、何れの先生でも同様であった）。又時間の制限も時間表には定まって居るが、実際は殆んど無視せられ、二時間のものが三時間となっても四時間となっても一向差支なかった。外山先生の試験は午後の一時から始まったので学生は殆んど総べて四時か遅くも五時頃迄には答案を書終り退席したのであるが、米山君だけは独り晩の八時頃迄居残り、漸く其答案

を終った、が、外山先生は早く既に帰宅せられたので之を当直の事務員に託し翌日先生に手渡しするよう依頼し帰ったという。これは当時学生間の一ツ話となって居たものである。如何にもノンキさの一端を知り得るのである。

○

私の京都在住以前の漱石からの手紙も色々あり、又之を保存して置いたのであるが、私の留学前後には書籍は友人の宅へ、其他の雑物は家兄の小松（石川県）の宅へ預けたのであるが、其後小松に出水があり、家財器物も

泥水に浸たされ、漱石の手紙も其中にあったので、竟に其所在が判らなくなって了ったのは如何にも残念に思うところである。今私の手許には僅か三通だけが残って居る。其一通は明治四十年一月十一日附のものであって、私の結婚の通知に対する単簡たる祝詞である。

今般は目出度御結婚の由新春心御祝儀をかね奉遙賀候

謹言

正月十一日　　夏目金之助

松本文三郎様

追白小生舊臘より表面の處へ轉居致候間左様御承知被下度候

（表面の處とは本郷區駒込西片町十番ろノ七号である）

○

第二の手紙は同明治四十年四月十三日附のものである。これは漱石が此年関西地方を旅行し京都へ来た序、私の山房を訪問し、食事を共にし半日を雑談に費した時の礼状である。私の山房は銀閣寺の北に在り、市街とは稍隔って居るので、漱石には大変気に入ったらしく、東京附近では斯んな住宅は到底求め得られないといって大

に賞賛して居たのである。

拝啓京都滞在中は尊来を辱ふせるのみならず銀閣の仙境に俗塵を振ひ落し候噸かし御迷惑事と存候其後諸方に流轉昨十二日漸く歸庵一寸御暇乞に參堂可仕筈の處行李忽〻不得其意聊か尺箋をそめて遙かに感謝の意を表し候餘は他日拜眉の節萬縷徨　艸〻不悉

四月十三日　　金之助

亡羊先生座下

乍筆末御令閨へよろしく御傳言願上候

（書柬宛名の亡羊とは私の雅號である）

○

第三の手紙は明治四十一年六月二十二日附のものである。此手紙には少しく注釈を要する。京都大学の文学部（旧文科大学）は明治三十九年に創設せられたのであるが翌年には哲学科のみが置かれ、翌四十年に史学科、更に四十一年に始めて文学科の講義が開かれたのである。所で文学部開講の際、英文学も是非置かなければならぬと考えて居たのであるが、其教官に多少手薄な所があり、此際漱石に如何なる名義にても其講義を助けて貰えば誠に大学の為め幸であると感じ、其前年私が上京の時、漱

石の宅を訪い其希望を述べて置いたのである。漱石も其時は私等の希望を拒絶せざるのみならず、事によったら多少の講義をしても宜しい、が題目は今何等思い当るところもないから、尚熟考の期間を与えて貰いたいとのことであったので、私も十分考慮を願いたいと言って別れたのである。翌四十一年六月愈開講の期が迫ったので、再び書面を以て漱石の意志を問合せたのである。此手紙は其時の返書である。

尊書拝讀舊臘御出京の節御約束申上候隨意講義の件に

つき改めての御依囑却つて恐縮致候たとひ短時間の講義にても御希望を満すを得ば小生の光榮と存居候へども何角多忙にて纏まりたる考も浮ばず従つていつ京都へ参り何の問題にてどの位の時間開講致す様の確たる御返事も致しがたく甚だ御氣の毒と存候。又社の方は萬一講義調へ了りたる時は其節一應許諾を得る心持につき夫迄は打棄置候考に御座候。隨意臨時の性質なれば強ひて故障を入るゝ必要も無之と存候。否當初御相談に乗り候節は幾分か大阪朝日の便宜にもなり候はんかの愚存も有之候位なれば其點は左したる心配も無之候へども只講義が出來

るや否やに就ては頗る背約に終りはせぬかと心配致候。
（表立ちたる講師任命杯の事は貴君も小生も新聞社も此際迷惑なるべければ先づ小生の分は臨時飛入位の御含位に留め置かれ公然時間割の發表は無論、名前も其間際迄は御出し被下間敷様願上候）
右甚不得要領にて御氣の毒ながら當座の御返事迄申上候曖昧の段は平に御堪辨にあづかり度候　草々

六月二十三日　　金之助

松本學兄

斯くして此交渉もとうとう実現さるるに至らなかった

ことは私の今以て遺憾とするところである。（尚書中新聞社との関係のことは、若し新聞社との交渉が必要ならば、大学の方から直接申入れ承諾を得るようにしても宜しいと申込んだに対する返事である。）

日本文学電子図書館

漱石の思い出

著　者：松本文三郎
制作者：宮澤一郎
底　本：漱石全集（昭和49年版）附録
岩波書店
昭和50年3月10日 発行

日本文学電子図書館